

# 四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

## 談話室 Vol.66

### 「佐田岬半島と水の歴史」

愛媛県 伊方町長  
やました 山下  
かずひこ 和彦



私たちが暮らす伊方町は、リアス式海岸独特の変化に富んだ美しい自然と、温暖な気候が育む実り豊かな、四国最西端の日本一細長い佐田岬半島にあります。

伊方町は四国唯一の原子力発電所立地町であり、発電所関連の税収や国の電源三法による交付金等により、生活環境整備や公共施設の充実などを行い、飛躍的に成長を遂げて参りました。

しかしながら、この半島地域の暮らしを変え、発展に寄与した大きな要因は、佐田岬メロディーラインの開通と南予用水事業の完成にあるといえます。

その昔、この地域は水不足に悩まされており、南予用水事業によって水不足が解消したことの恩恵は計り知れないものがあります。

かつて、半島一帯は、急傾斜地を切り開いた石積みの段々畑が山頂付近まで広がり、芋類や麦類などの栽培が盛んに行われていました。

しかしながら、土地の貯水力は乏しく、夏の渇水期には、常に水不足に悩まされ、農業への影響だけでなく、日常生活でも水道の断水に迫られることが珍しくありませんでした。

人々は、日頃から水を大切にし、雨水受けを作って雨水を利用したり、共同井戸から水を桶で担

って石段を運んだりしていましたが、一度水不足になると、人の力ではどうすることも出来ず、雨乞いなどをして祈るほかありませんでした。

町内の共同井戸や湧き水に、水神様が祀られた様子を見ますと、当時の暮らしが偲ばれます。

そのような中で、昭和42年8月の大干ばつをきっかけに、国は南予水資源開発事業として、野村ダムから佐田岬半島など宇和海沿岸の全地域へ、上水道と農業用水を供給するという大事業に着手しました。

半島住民の悲願であったプロジェクトは、町内の伊方調整池の建設などを経て、平成8年度に全て完成し、日常生活での水不足の心配が解消されたほか、農作業につきましても、スプリンクラーの整備により、かん水や農薬・液肥の自動散布が行われ、作業の省力化と安定的な果樹生産が可能となっており、半島の暮らし全体が大きく改善されました。

水や電気が不自由なく使用できるようになった今日、当たり前であることのありがたみを自覚するためには、過去の歴史を振り返り、将来に伝えることが大切であると思っております。



畑地かんがい施設



南予用水伊方調整池